「コロナの中　攻めていくしかない!」

自動運転レベル2　100台導入へ

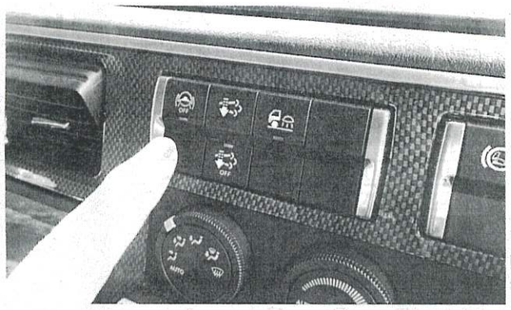
富士運輸

国内商用車初となる自動運転レベル2対応第1号車が3月に富士運輸㈱（松岡弘晃社長、奈良市）に納車された。三菱ふそうトラック・バスの大型トラック新型スーパーグレートで、高度運転支援機能を搭載している。

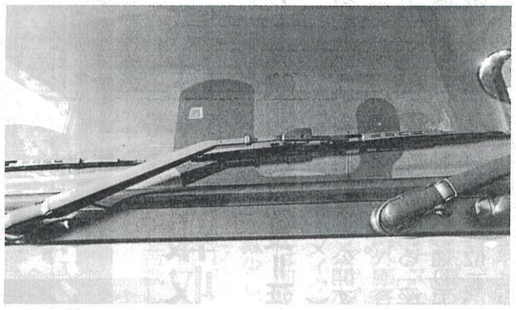
車両前部の高精度レーダーとカメラを通じて道路状況や車線の情報を分析。追従型クルーズコントロールによるアクセルとブレーキの制御に加え、ステアリングを制御して車両を同じ車線内に維持する「車線逸脱抑制機能」を搭載する。

車線逸脱抑制機能では、時速60キロ以上での走行中にドライバーによる意図しない車線逸脱が発生した場合に車両を車線内に戻す。

導入した富士運輸の自動運転トラック



運転席パネル　自動運転機能が追加された



前部のセンサーとカメラで自動運転を支援

試乗した同社厚木支店の清水順一朗さんは、「レベル2はハンドル補正が付いたのが大きな特徴。車線をはみ出したら勝手にハンドルが動いてくれる。ドライバーが居眠りしてもレーンを外さない。ヒューマンエラーが減り、事故が減る確率は高くなる」と話す。

松岡社長は、「レベル2のトラックは月間20台ずつ入れ、合計100台入れていく。新しい支店へ積極的に導入し、初心者のトラックドライバーに乗ってもらう。コロナで大変な事態になっているが、攻めていくしかない」と意気込んでいる。

「コロナに必ず打ち勝つ」

混載の拠点を関東に延伸

アイエヌライン

車両350台を保有して事業展開する㈱アイエヌライン（奈賀幾次郎社長、本社＝福岡県吉富町）は、2年前にスイッチセンター（SC）を兵庫県三田市に開設し、九州―関西間の混載荷物の幹線輸送を開始した。九州、関西地域における集配業務も行ってきたが、3月からは、九州―関西―関東間の幹線輸送、集配業務をスタートさせた。

自動車部品を扱う同社は大型トラックに自動車部品を頭にし、一般荷物を後ろに積載して混載輸送を行っている。

九州で集められ、大型車で三田SCまで運ばれた荷物は、4トン車に積み替えられ、関西地区に配送。また、関西地区で集められた荷物は三田SCで大型車に載せ替えられ、九州へ運行されていたが、これらの業務が関東地区でも行われるようになった。

田村副社長（右）と三田ＳＣ出口所長代理

同社ではトラックの365日24時間稼働を目指している。トラックは休ませずに動かし続け、運転手は交替させて、コンプライアンスを守り、付加価値を上げようとする取り組みだ。

同社の村田務副社長は、「コンプライアンス上、長距離輸送では関東から岡山まで行くのがせいぜい。九州からは滋賀あたりまで。車はそのまま動かして、別の乗務員が交替で乗る仕組みを構築している。大型は月1台300万円の売上が目標。コロナの逆風に必ず打ち勝つ」と話している。

同社は現在、年50台のペースで車を増やしていっている。

三田ＳＣ　２４時間稼働を目指している

天クレ付き倉庫稼働！「今こそがチャンス」

ヨロズ物流

㈱ヨロズ物流（新谷剛社長、大阪府富田林市）は敷地面積2000坪、床面積500坪の大阪第4倉庫を竣工させ、このほど稼働させた。

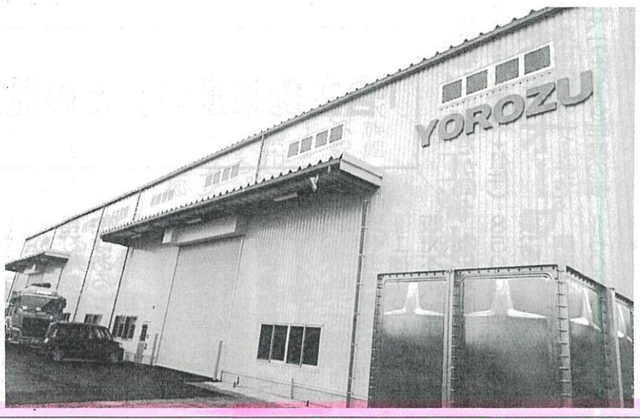
倉庫は、システム建築により柱をなくし、デッドスペースをなくした。倉庫の天井高は12mあり、4・8トンの天井クレーンを2基設置した。

同社は他に、静岡、大阪堺、大阪高石に倉庫を持つがすべて天井クレーンを備えている。

同社では、「2・9トンのクレーンが一般的だが4・8トンのクレーンを入れ、大型の荷物を扱えるようにした。コロナで大変な状況に違いないが、今こそがチャンスと捉えている」と意気込む。

現在、荷物を募集中。問い合わせは☎0721-24-8927番。

4・8トンの天井クレーンを2基設置



新倉庫外観